

## 2. 機械の日

### 2.1 はじめに

機械の日は、東京大学の故・笠木伸英先生が 2005 年度に筆頭副会長であったときにご提案され、その期の庶務理事を担当していた森下がお手伝いして、「機械の日」制定に向けて動き出した。世間一般に「機械とは何か？」を提示し、さらに日本機械学会の社会的認知度を向上させることが第一の目的であった。以下の文章は笠木先生が当時の理事会に報告された内容の抜粋である。

### 2.2 制定に向けた動き

#### 2.2.1 制定の背景

“機械文明”という言葉に代表されるように、人間社会は機械の発明、普及によって発展してきた。すなわち、人間は古代からさまざまな機械を創り出し、生産活動や生活に役立て、さらには新しい価値創造を果たしてきた。特に 18 世紀に始まった産業革命以降、機械は原動機や荷役機械として、開発、生産加工、製造、輸送、物流、通信などを支えてきた。現在では、教育、医療、メディアなどさまざまなサービスも含めて、人間社会のあらゆる側面を支えるインフラのひとつになっている。機械と社会の関係は時代と共に変質を遂げてきたが、新世紀に入り情報、ナノ、ライフサイエンスなどに関わる新たな技術革新が進行する一方、人口増加、資源枯渇、環境劣化、気候変動などの地球規模の困難な問題が惹起する中、“機械”の社会的意義と役割を再考し、人間と機械の相応しい関係を模索する必要がある。

我が国は技術立国を標榜し、世界のフロントランナーの一員として国際的な責任を果たすことを国策として掲げている。この目標を達成するためには、技術の中核を担う機械技術をさらに発展させ、新たな価値創造、ものづくりを進める必要があるが、それには責任ある産官学の協働が必須であると同時に、広く社会に機械技術の重要性への理解を促し、社会と技術のより良い関係を思考する機会を提供する必要がある。

以上の背景から、機械及び機械システムとその関連分野に関する学術技芸の進歩発達をはかり、もって人類社会の発展と安寧及び福祉の向上に貢献することを目的とする日本機械学会が、関係各方面と協力して、「機械の日」を制定し、各種活動を行うことは極めて時宜を得たことと言える。なお、「機械の日」制定は、本会第 2 世紀将来構想計画推進委員会答申にも明記された、学会の長期的な方針の一つである。

#### 2.2.2 制定に至る活動計画の概要

記念日として、誰にも理解しやすく、馴染みやすい月日を選択する必要がある。そこで、機械にまつわる歴史、特に技術史の調査研究から、“機械”を記念するに相応しい月日を選択するものひとつの方法であろう。また、青少年らが関連行事に参加しやすい夏期休暇の時期に設定することが望ましいと言える。「機械の日」は、2005 年度に会員へ基本的提案を開示し、会員の意見を踏まえて理事会が評議会に提案し、決定することが適切である。2006 年度に制定し、関連企画行事は本会が 110 周年を迎える 2007 年度に開始することが適切であろう。

毎年の「機械の日」を含む 1 週間程度を活動期間として、機械の発展普及を目指し、機械の現状や役割についての啓蒙を進め、社会と共に機械のあり方を考える機会とする。具体的には、本学会が中心となって、本部、支部、部門の各組織、あるいはそれらの協力によって各記念行事の企画開催を行う。関連の省庁、産業界、関連学協会、研究教育機関、初等中等教育機関、メディアなどとも、広く協力を進め、参加を募る。行

事としては国際会議、講演会、シンポジウム、展示会、実演会、実習会など、そして特に一般社会、青少年に開かれた行事を重視して企画開催する。

### 2.2.3 ねらいと期待される効果

- ・国や社会を支える技術の役割、社会と技術の関係を、広く社会と共に俯瞰し思考する機会とする。また、機械技術、機械技術者の将来ビジョン、そしてロードマップを構築し、機械技術が産業や社会の健全な発展に果たすべき使命を再確認する。
- ・技術者の社会的な地位向上を図る。特に、機械技術者の重要な役割に対し、社会の理解を涵養する。
- ・若年層の理工系離れ、技術離れを回避し、次世代の技術者の育成を支援する。女性技術者の育成を支援する。
- ・機械に関わる国際的な学術交流、技術交流の促進、そして外国人技術者の育成を促進する機会とする。
- ・学会の広報活動のひとつとして活用し、学会のプレゼンスを示す。

以上が抜粋ではあるが、「ねらいと期待される効果」に列挙された項目は日本機械学会にとって現在も継続的に重要な課題となっており、機械の日を制定した目的が達成されたとは必ずしも言いがたいように思われる。

## 2.3 8月7日とした理由

- 2006年1月10日に開催した機械記念日制定委員会の議事録によれば、下記のような討議が行われている。
- ・七夕の起源は、唐伝来の「乞巧奠」（きこうでん、技巧の上達を祈念）の風習とする説がある。日本では、乞巧奠以前から棚機女（たなばたつめ）という巫女が、水辺で神の降臨を待つという農村の「禊ぎ（みそぎ）」の行事があった。たなばたの読みは棚機からきているとする説もある。七夕は機織りの上達を祈念する日とした記録がある。
  - ・旧暦の7月7日の新暦への換算は、準拠する暦によって異なる他、年によって日が一定しない。
  - ・仙台七夕祭りは、旧暦を単純に一ヶ月ずらす方式（「中暦」）にしたがって8月7日を中心に実施されている。
  - ・今昔物語に「からくり童子」の記述がある。早暁時に水をかけ田に水を満たすとのいわれがある。8月頃の事例と思われるが時期は特定できない。
  - ・薩摩藩の蒸気機関完成日も候補だが、蒸気機関だけでは概念が狭く、終戦記念日に重なるので、日程を問題とする意見もあろう。
  - ・七夕が最も無難ではないか。開催時期は児童の参加の観点からは8月上旬が良いと思われる。その点から七夕の中暦（8月7日）が無難ではないか。
  - ・各種イベントに1週間を充て、その中の1日を記念日とするのが实际的である。

七夕には諸説があることは調査の結果判明したが、結論として、当時の機械の代表であった機織り機械の技術上達を願う日でもある七夕を機械の日として設定することになった。同時に社会的な動きを考慮して、初等中等教育機関が夏休みとなる8月が望ましく、そのために7月7日の中暦である8月7日を機械の日とした。

図は機械の日を世間一般に広報するためのポスターである。武器を好んで選んだ訳では決してないが、からくり人形の代表作として知られる「弓曳き童子」を題材にして、イラストレータの山中俊治氏に製作を依頼したものである。山中氏はロボットのデザイン設計も担当しており、しかも機械工学の出身であり、近未来的なロボットが弓を引く様子を描いている。「機」の隷書体をデザインしたもので、8月7日という日付もデザインの中に織り込んでいただいた。



機械の日 広報ポスター

## 2.4 その他

機械の日を制定する経緯の中で、歴代の会長にもご意見を伺った。今井兼一郎先生、一色尚次先生、佐藤豪先生、國枝正春先生、堀幸夫先生、相川賢太郎先生、大橋秀雄先生、土屋喜一先生、田中實先生、岡村弘之先生、井口雅一先生、伊藤誼先生、長島昭先生等から積極的なご賛同をいただいた。さらに、日本経済新聞社の論説委員、日本放送協会の解説委員、さらには共同通信の論説委員にお集まりいただき、機械全般に係わるご意見をいただくと同時に、「機械の日」制定に関する幅広い意見交換を行った。

「機械の日」、「機械週間」は制定後も継続的に全国で行事が行われてきたが、10年を経て同じ事を続けられれば世間の興味が離れ、「機械の日」関連行事の進め方について早急に再検討が必要な時期にきている。

〔森下 信 横浜国立大学〕